椋鳩十作「太郎のかた」に関する一考察

内山三枝子　　棚橋美代子
（大学院研修者）　　（児童学科教授）

はじめに

椋鳩十児童文学研究において，椋鳩十のルポルタージュ作品「軍神につづく横山少年團」（『幼年倶樂部』，大日本雄辯會講談社，1944年1月号）の発見[1]により，従来の作家椋鳩十及び椋鳩十児童文学研究の再検討がせまられている。再検討の必要性に言及した鳥越信は，①「負の部分も含めた作者の全体像をまずおさえる，という研究者としての原点を忘れた私の責任はきわめて大きい」[2]②「椋鳩十はあの過酷な戦時下にも，戦争協力の作品を書かなかった，といった意味のことを何度もくりかえした点でも，私のおかしたまちがいはきわめて重大である。」[3]という自己批判のもと，「従来かえりみられなかった負の側面も含めた研究をおしすすめることこそ，椋文学を心から愛してきた私にとって，何よりも私自身のまちがいと責任をつぐなう唯一の道だと考えている。」[4]と述べている。

また鈴木敬司は，「軍神に続く横山少年團」の存在を取り上げながら，「椋鳩十が，あのような『報道記事』を書かざるを得なかった心境が，私にはじゅうぶんに推察できる。」[5]と述べた。その上で鈴木は，椋の「軍神につづく横山少年團」の執筆に関し，本名を使用したことを椋の「精いっぱいの抵抗」と解釈しながらも自己の見解に迷いがある。さらに鈴木は椋文学の大衆性について論じる中でも自らの「高い評価」[6]と再検討の必要性への迷いを記している。[7]以上の見解を述べながらも，両者は依然として「負の側面も含めた研究」の成果は示していない。

今回，「軍神につづく横山少年團」と同じく『幼年倶樂部』（1942年6月号）に掲載された作品「太郎のかた」を取り上げ，この作品が当時の国策に沿って書かれたものであり，子どもを国家の人的資源として育て，自ら「喜んで身を差し出す」ように仕向ける教化・動員のための作品であることを述べる。同時に，そこに当時の椋の思想性の表われをみるものである。

目　的

本研究の目的は，上述したように作品「太郎のかた」が当時の国策に沿って，子どもを国家の人的資源として育て，自ら「喜んで身を差し出す」ように仕向ける教化・動員に繋がる作品であり，椋が当時の国策や『幼年倶樂部』の編集方針を受け入れ，執筆したものであることを述べる。

方　法

作品「太郎のかた」について，以下の2点に着目して分析及び考察を進める。

(1)　主人公「太郎」の人物像の変化

(2)　「野天風呂」の意味の変化

「野天風呂」は，物語の初めに太郎の「課題」として示される。従って，主人公「太郎」の成長に大きくかかわる鍵となるものである。

1　作品「太郎のかた」

(1)　作品成立の時代背景

1941年12月8日に太平洋戦争が開戦となり，8日付け夕刊には「帝國・米英に宣戰を布告す」[8]翌12月9日の新聞紙上には「ハワイ・比島に赫々の大戰果」[9]の見出しとともに多大な

戦果が報じられた。こうした記事が続く中，1942年３月６日には真珠湾攻撃の際，特殊潜航艇に乗り組み戦死した９名の海軍兵士についての大本営発表があり，翌７日，新聞紙上で９名の海軍兵士は「軍神」として称えられた[10]。以来「九軍神」は連日のように新聞紙上，雑誌などで取り上げられ，1942年５月号の『幼年倶樂部』でも，「九軍神」を讃える詩や九軍神の一人である岩佐直治中佐の人物像を紹介した作品が写真入りで掲載された[11]。こうした戦局の中，翌６月号の『幼年倶樂部』に椋鳩十作「太郎のかた」は掲載された。

(2) 「太郎のかた」の構成

作品「太郎のかた」は，主人公の10歳の少年太郎と兵隊の交流を中心に描かれたごく短い物語で，「導入，展開，結末部」の３部に分けられているが，展開部は，前半と後半に分けられ，いわゆる起承転結の筋の運びとなっている。その内容は以下の通りである。

導入部（太郎の課題）

導入部は，主人公太郎と父親の人物設定，太郎の課題が示される。

主人公太郎の家の風呂は，野天風呂である。しかし太郎は友人の春男君の家の近代的な内風呂を羨み，父親に訴える。それに対して父親はいつも太郎に野天風呂の素晴らしさを語る。父親の言葉を聞いても，春男君の家の風呂を羨む太郎の気持ちは解消されない。

展開部（兵士との交流）

展開部は，太郎の家に分宿した兵隊さんと太郎の交流が中心に描かれる。

展開①：演習帰りの兵隊さんが太郎の家に分宿することになり，兵隊さんの到着を心待ちにする。太郎の兵隊さんに対する尊敬や憧れの気持ち，親近感などが表される。

展開②：太郎は，部隊長ひげをはやした兵隊さんと一緒に野天風呂に入り，兵隊さんの家も同じ野天風呂だと知り嬉しくなる。さらに兵隊さんから，風呂の水汲みのお手伝いをして，大きな日本が担がれるような丈夫な肩をつくるよう励まされる。

結末部（太郎の成長）

結末部は，太郎の変化・成長した姿が示される。

兵隊さんの言葉に触発され，太郎はその翌日から風呂の水くみをし，日本を担げるような丈夫な体を作ろうと精を出す。そうしているうちに，太郎の体の中に日本をぐっと背負うことができる力が満ちていく気がする。野天風呂に対する太郎のこだわりは，解消される。

(3) 「太郎のかた」の展開

「太郎のかた」の展開を図に示すと以下のとおりである。

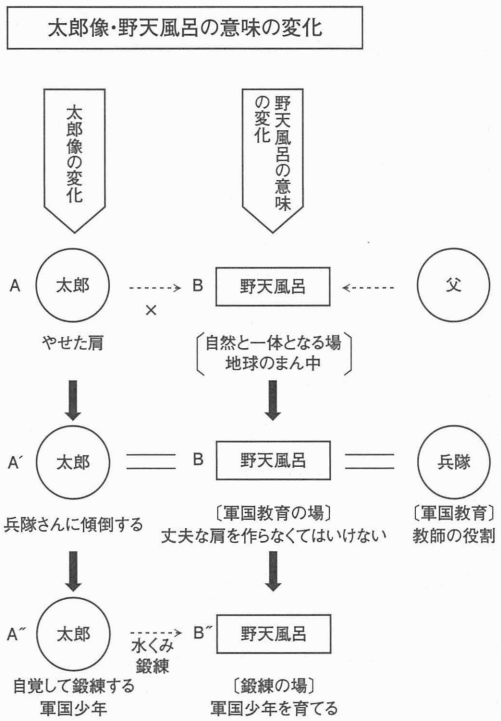

図１

2　分析及び考察

すでに「方法」で述べたように，(1)主人公「太郎」の人物像の変化，(2)「野天風呂」の意味の変化に着目しながら，図１：「太郎像・野天風呂の意味の変化」に沿って分析及び考察をする。

太郎像・野天風呂の意味の変化

(1)「太郎」の人物像の変化

［A］の「太郎」像

「野天風呂」にこだわる気持ち（課題）を持った，「やせた肩」の少年「太郎」。

ア）「…春男くんとこのやうな，ふろがほしいなあ。…」（下線は筆者による。以下同じ。／『幼年倶樂部』1942年6月号「太郎のかた」，本文＜以下「本文」と表記する＞p. 48）

イ）「『出た出た月が…』や『かって來るぞと…』をうたってゐる時…」（本文 p. 48）

ウ）「ことし十歳になる太郎は，やせたかたを…」（本文，p. 49）

太郎は今年10歳になる「肩のやせた」少年である。父親と風呂につかりながら，文部省唱歌「出た出た月が…」[12] や軍歌「かって來るぞと…」[13] を口ずさむ当時のごく一般的な少年像が示される。ここで注目するのは，以下の3点である。

ア）「野天風呂」にこだわる気持ち

イ）文部省唱歌「ツキ」と軍歌「露営の歌」

ウ）太郎の「やせたかた」

上記の3点は，以下に示したように何れも今後の太郎の変化の可能性を予見させる要素である。

ア）こだわる気持ち→こだわりからの解放

イ）唱歌と軍歌　→唱歌
　　→軍歌

ウ）「やせたかた」→「たくましいかた」

「野天風呂」は太郎のいわゆるコンプレックスとなっており，これは太郎の課題である。従って，物語の初めに示された「野天風呂」にこだわる太郎の気持ちは，今後そこから解放され，変化・成長する可能性を暗示している。また同様に，太郎の「やせたかた」も「逞しいかた」へと成長・変化する可能性を暗示している。

文部省唱歌「ツキ」と軍歌「露営の歌」については，対照的な2つの歌を歌う太郎の姿に，今後，「軍歌」に象徴される兵士や戦争などに繋がる可能性を含むことが示されている。

［A′］の「太郎」像

「兵たいさん」に傾倒し，「兵たいさん」から教育を受ける「太郎」。

①「兵たいさん」に傾倒する太郎

ア）兵たいさんがとまるといふことは，おまつりのたいこの音より，もつと，こころがわくわくすることです。／學校から，おいちにおいちに，かけあしでかへつて來ました。（本文，p. 49－50）

「おまつりのたいこの音より，もつと，こころがわくわくすることです」の言葉により，演習帰りの「兵たいさん」を家に迎える太郎の嬉しさが尋常ではないことを示している。また，「おいちに，おいちに」と学校から駆け足で帰ってくる様子に，太郎の弾む心が表れており，兵隊さんの到着を心待ちにする気持ちが読み取れる。これらは来客を喜ぶ子どもらしい様子を示したものであるが，その来客は「兵たいさん」であり，しかも太郎の家に泊まるのである。そのことが，太郎の心を特別に高揚させていると思われる。さらに，「おいちに，おいちに」の駆け足は，兵隊を模して遊ぶ「兵隊ごっこ」[14] のつもりとも読み取れる。

ウ）たた，たたた，たた，たたた。／太郎はきくわんじゆうのまねをして，かけて行きました。（本文 p. 50）

「兵たいさん」にごちそうするお肉を買ってくるよう母親に頼まれた太郎は，機関銃の真似をしながら，お使いに駆けて行く。太郎にとっては，「兵たいさんのためにお肉を買う」という特別なお使いである。「たた，たたた，…」とリズミカルな機関銃の音に，喜び勇んで駆けて行く太郎の様子が読み取れる。また，機関銃の真似は「兵たいさん」から想起されたイメージの再現，あるいは「兵隊ごっこ」のつもりであろう。太郎は，当時の少年たち同様「兵

たいさん」に尊敬や憧れの気持ちを持っており，「戦争ごっこ」に日々興じる一般的な10歳の少年として描かれている。

エ）太郎は大よろこびで，兵たいさんと　いつしよに，はいりました。（本文 p. 50－51）

太郎を風呂に誘ったのは，部隊長ひげを生やした兵たいさんであった。親しく声をかけてもらい，風呂に誘ってもらうだけでなく，その兵隊さんが部隊長らしい「立派な」兵たいさんだったことも殊更太郎を大喜びさせていると思われる。また，一緒に風呂に入ることで，太郎と「兵たいさん」の距離は縮まり親しさが増す。

オ）うちのふろも，ひげの兵たいさんとこのとおなじだと思ふと，太郎は，うれしくなつて來ました。（本文 p. 51）

［A］の太郎は「野天風呂」を受け入れ難く感じていた。しかし「ひげの兵たいさん」の家の風呂と同じであったことで「兵たいさん」に対する尊敬，憧れに加えて，信頼・親近感も一段と増してくる。こうしたポジティブな感情を一気に加速させたのは，二人の共通点「野天風呂」である。こうして［A′］の太郎は，「兵隊さんに傾倒する」気持ちを強める。

②「兵たいさん」から教育を受ける太郎（軍国教育）

ア）『…今，日本が，ぐんぐん大きくなつてゐること，學校でをそはつたはずだね。…』

「日本が，ぐんぐん大きくなつてゐること」[15] というのは，作品「太郎のかた」の掲載時期（1942年6月号）を考えると，太平洋戦争開戦から半年間の様子を伝えていると考えられる。また，「學校でをそはつた　はずだね」[16] という兵隊さんの言葉は，日本軍の戦果が国民学校でも日常的に「教えられ」，日本軍の大勝利が国民学校の生徒にも自明のことであるとしている。当時国民学校では「児童の目を常に『大東亜戦争』それ自身の進展に向けさせるため」[17] 戦況についての日常的な学習が行われていた。作品「太郎のかた」の兵たいさんの言葉，「學こうでをそはつたはずだね」は，当時の国民学校における戦争教育の一端を示したものであり，子どもを「大東亜戦争の進展に向けさせ」，「皇国の使命」へと意識付けるものであった。

イ）『ああ，十さいか，ぢや，もう，ふろの水くみのおてつだひできるね。水くみのおてつだひして，日本がぐつと，かつがれるやうな，ぢやうぶな　かたをつくらなくては，いけないな。』（本文 p. 52）

「兵たいさん」は，太郎に「水くみのおてつだひして」と鍛錬のための具体的な実践方法を示し「日本を担ぐことができる丈夫な肩を作らなくてはいけない」と激励した。［A′］の太郎は，「兵たいさん」に大きく傾倒する中で，「兵たいさん」から激励のメッセージを受け，教育される。「兵たいさん一般」に対する太郎の尊敬・憧れといった気持に加え，「部隊長ひげの兵たいさん」との「野天風呂」の共有（一緒に風呂に入る，コンプレックスであった「野天風呂」が同じ）により，太郎の「兵たいさん」への信頼感，親しみの気持ちが増大する。こうして「兵たいさん」は太郎にとって重要な存在となり，物語の中でクローズアップされる。従って，重要な存在となった「兵たいさん」からの激励のメッセージは，作品の主人公「太郎」や「読者」へ印象深く効果的に伝わる。

鈴木敬司は，「大きな日本がかつげるようになつてくれ」という「抽象レベルの高い慣用的な言い回しの意味は」作中の「太郎」も『幼年倶樂部』の読者もはっきりとは理解できなかったのではないか[18] と述べている。しかし，この言葉の真意は分からなくても「大きな日本がかつがれるような丈夫な肩を作らなくてはいけない」という題目を基に，「水くみのおてつだいをして，丈夫な肩を作る」という具体的なメッセージは作中の「太郎」にも『幼年倶樂部』の

読者にも十分伝わったと思われる。

作品「太郎のかた」に描かれた①「大きな日本をぐっと担がれるように」という題目の下，水汲みなどの②「手伝い」をしながら③「体を鍛える」ことは，「かっ達剛健な心身と献身奉公の実践力」を有し，「勤労を愛好」し，やがては「産業の国家的意義を明らかにし，職業報告の実践力を有する」皇国民としての資質を錬成するための基礎となるものであった[19]。

［A″］の「太郎」像

自覚して鍛錬する「軍国少年」となった「太郎」。

［A″］は，「兵たいさん」の激励のメッセージに従って実践する太郎の姿が描かれる。

ア）「太郎は，そのよくじつから，ふろの水くみはじぶん一人でひきうけました。」（本文 p. 53）

イ）「なんばいも，なんばいも，バケツで水をはこびます。」（本文 p. 53）

ウ）「…太郎のからだの中にも，日本をぐつと，せおふことのできるちからが，まい日，少しづつ，少しづつ，みちていくやうなきがするのでした。」（本文 p. 53）

太郎は野天風呂で「兵たいさん」から「教育」を受け，「大きな日本を背負う」という使命に目覚める。こうした使命を自覚した「太郎」は，風呂の水汲みを「自分一人で引き受け」鍛錬する。日々の鍛錬の中で，太郎は，自分の体の中に「日本をぐっと背負うことのできる力」が満ちていくのを感じる。「太郎」がこうした鍛錬を続けることにより，「やせたかた」は逞しい「かた」へと変化・成長してきていることが想像できる。また，太郎［A］の課題であった野天風呂へのこだわりは，ここではすっかり消失している。

以上述べたように作品「太郎のかた」は，「やせた肩」を持った少年太郎が，「兵たいさん」の教育により「逞しいかた」の持ち主へと変化・成長する物語である。太郎の成長に大きく「貢献」したのは太郎がこだわりを持っていた「野天風呂」であった。次にその「野天風呂」の持つ意味の変化を考える。

(2) 「野天風呂」の意味の変化

［B］の「野天風呂」

自然と一体となる場，「地球のまん中に，でんとすゑられた，すばらしいふろば」

ア）「太郎のいへのふろは，のでんぶろです。／おとうさんが，わかいころにつくつたふろをけで…」（本文 p. 47）

イ）「…このふろばのやねは，そら，あの山のむかふまでつづいてゐる，青てんじやうだぞ。…（中略）…どうだい，太郎。このふろばは，ちきうのまん中に，でんとすゑられた，すばらしいふろばじやないかい。」（本文 p. 48）

「野天風呂」［B］は，元来こうした太郎の父親の言葉に示されたものであった。しかし，太郎の思いは，これとは異なり「やつぱり，春男くんとこのやうな，ふろばがいいなあ」と「野天風呂」を受け入れられない。

［B′］の「野天風呂」

「大きな日本を担ぐため，丈夫な肩を作らなくてはならない」と教育する「軍国教育」の場となった。

ア）「兵たいさんは…かたまでゆにつかりました。」（本文 p. 51）

イ）「ぼくのところのも，のでんぶろで，牛ごやのわきにあつてね，ぼくのおぢいさんのだいからので，これとおなじふろだ。」（本文 p. 51）

尊敬・憧れの対象である「兵たいさん」は「野天風呂」につかり，自分の家の風呂も同じ「野天風呂」だと太郎に告げる。それを聞いて「うちのふろも，ひげの兵たいさんとこのとおなじだと思ふと，太郎は，うれしくなつて來ました。」（本文 p. 51）とある。「うちのふろも」とあるように，コンプレックスを感じていた自分の家の「野天風呂」が，憧れの「兵たいさ

ん」，しかも「部隊長ひげの兵たいさん」の家の風呂と「同じ」であることがわかり，太郎は嬉しくなる。このように，太郎の家の「野天風呂」は，兵隊さんと一体化されることで，その価値は「兵たいさん」と同等になり，もはやコンプレックスの対象ではなくなってしまう。

さらに，「兵たいさん」と一体化した太郎の家の「野天風呂」は「兵たいさん」に象徴される「戦争」と結びつく「場」となる。「これは，ちよつとばかりやせてゐるな」と太郎の肩をたたき，今，日本がぐんぐん大きくなっていることを学校で教わっているはずだねと「兵たいさん」の戦争教育が始まる。「兵たいさん」は「どうかな，大きな日本が，このかたで，かつがれるかしら」と問いかけ，「水くみのおてつだひして，日本がぐつと，かつがれるやうな，ぢやうぶなかたをつくらなくては，いけないな。」と激励のメッセージを太郎に伝える[20]。この激励は，侵略戦争を続ける日本を担う担い手になれと，太郎に対し励まし奮い立たせるもので，「野天風呂」［B′］は，太郎を「軍国少年」へと方向付ける「軍国教育の場」へと変化した。従って，ここでは「兵たいさん」は「軍国教育」を施す「教師」の役割を担っている。

［B″］の「野天風呂」

「軍国少年」を育てる「鍛錬の場」となる

ア）「太郎は，そのよくじつから，ふろの水くみはじぶんひとりでひきうけました。」（本文 p. 53）

イ）「なんばいも，なんばいも，バケツで水をはこびます。」（本文 p. 53）

ウ）「…この水がみちていくやうに，太郎のからだの中にも，日本をぐつと，せをふことのできるちからが，……みちていくやうなきがするのでした。」（本文 p. 53）

太郎は，大きな日本を担げるような丈夫な体を作るため，自分一人で風呂の水汲み引き受けようになった。毎日「野天風呂」に何杯も水を入れることで体を鍛錬し，丈夫な肩を作るのである。太郎の鍛錬は，風呂おけに水をためるという具体的な行動を通して行われ，風呂桶に水が満ちる様子を見て，自分のからだの中に日本を背負う力が満ちてくるのを感じている。従って，「野天風呂」［B″］は，［B′］の「戦争教育」の場から，軍国少年を作りあげる「鍛錬の場」と変化した。

以上述べてきたように，「自然と一体となる場」であったのどかな「野天風呂」［B］は，「兵たいさん」によって「軍国教育の場」［B′］へと変化し，さらに「軍国少年」を育てる「鍛錬の場」［B″］となった。このように，大きな自然と一体であったのどかな「野天風呂」は，戦争推進のための教育・鍛錬の場となったのである。

「太郎」像の変化を見ることで肩のやせた，当時の一般的な少年太郎が，軍国少年に「変化・成長」する姿が見えてきた。鳥越が「…いかにも子どもらしい成長の一過程を描いた作品ともいえるが，そのきっかけが兵士の民泊だった点に重い意味があることを忘れてはならない。」[21] と述べたように，太郎の変化・成長のきっかけは，「兵たいさん」の民泊であった。その民泊の中で，「野天風呂」が大きな鍵となって物語が展開する。兵士を一般家庭に迎え入れ，食事や入浴を共にすることは，「一般市民の日常生活の中で軍隊や戦争に馴染ませ，市民の心脳に戦争参加意識を植えつけてゆくという思想動員」[22] を狙ったものである。またこれは，「当時の日本の国家と軍の司令部が，出征兵士たちの民家分宿を組織することによって，日常生活の中で一般市民を軍隊と戦争に馴染ませ，やがては軍と戦争の熱烈なサポーターにつくりあげてゆく，そのために人々の善意や人情の機微にまでつけいるという狡猾な手法を用いた」[23] ものであった。作品「太郎のかた」では，［A′］の太郎が「兵たいさん」に大きく傾倒する姿を示した。太郎が傾倒する姿が強ければ強いほど，「兵たいさん」の存在はクローズアップされ，「大きな日本を担ぐために，丈夫な肩をつくらなくてはならない」という「兵たいさ

ん」の激励のメッセージは力強く響く。こうして「兵たいさん」の力強いメッセージは，作中の主人公「太郎」や『幼年倶樂部』の読者の「心を強く揺り動かす。」[24] ことになる。

「大きな日本をぐっと担がれるように」とは，「克ク皇国日本ノ負荷ニ任ズベキ」[25] という皇国民の使命であり，水汲みの手伝いをし，体を丈夫にすることは「国民ノ基礎的錬成」であった。このように，当時の国民学校教育は，これを自覚し自ら進んで実践する子どもを育てるものであった。さらにその教育は国民学校の中だけでなく，「学校と家庭および社会との連絡を密にし，児童の教育を全うしようとした」[26] のである。「兵たいさん」が「野天風呂」で伝えた激励のメッセージは，まさに，当時の「国民学校」の教育理念に合致するもの，即ち当時の国策を支持するものであった。

以上，述べてきたように，作品「太郎のかた」は，当時の日常的な子どもの姿を描きながら，読者を「兵役」へと引き込んでいくものであり，教化・動員ための作品であると言わざるをえない。作品「太郎のかた」が掲載された1942年6月号『幼年倶樂部』の「御家庭の皆様へ」[27] に以下のように書かれている。

> 幼年雑誌の持つ感化力，及ぼす影響力の大きいことは，作家，畫家諸先生も，編輯者も，常々深く心してをります。御家庭の皆様においても，幼年倶樂部が，お子さんの心身の育成に，一層役立つやう，お骨折り頂きたう存じます。
>
> よく學び，よく働かう。お使もしよう，子守もしよう。出來ることはなんでもやらう。みんな元氣でしつかりやらうと，表紙で，卷頭で，呼びかけてゐるやう，六月號では，勤勞精神の鼓吹に重點をおいてゐます。表紙繪に見るやうな，勤勞を歡ぶ子供，『太郎のかた』のやう，將來日本を肩に擔はうとする子供，日本中の少年少女を，この心意氣に燃え立たせたいのです。諄々と說いて聞かせるのもよいでせうが，子供自身に共感共鳴を起させるやう，繪で，讀物で，子供の心を强く搖り動かすのが，雜誌の使命と信じます。（下線は筆者による）

上記の文面から，雑誌編集者が，作家が，画家が，こぞって子どもたちを「皇国民の錬成」に尽力する様が読み取れる。中でも，「…『太郎のかた』のやう，將來日本を肩に擔はうとする子ども，日本中の少年少女を，この心意氣に燃え立たせたいのです。」とあるように，作品「太郎のかた」の中で示された「兵たいさん」のメッセージは，1942（昭和17）年『幼年倶樂部』6月号の編集方針に則ったものであることが明確である。また，「子ども自身に共感共鳴を起させるやう，繪で，讀物で，子どもの心を强く搖り動かすのが，雜誌の使命と信じます。」と記されているように，当時の『幼年倶樂部』の読者は，「太郎のかた」の主人公太郎の姿に，「共感・共鳴」し，「強く心を揺り動かされ」，太郎の姿を自らの中に取り込んでいったと思われる。読者たちは，こうした主人公の姿を取り込みながら，やがて体をしっかり鍛え，「特別攻撃隊の勇士にまけない立派な潜水艦の艦長になろう」[28]「少年飛行兵になり，敵の飛行機や軍艦をやっつけてお国のために尽そう」[29] と考えるようになる。中には，「空の軍神加藤少將」[30] の読後感にあるように，「こんなりつぱなはたらきができたのも，だい一に，からだができてゐたからだと，つくづく思ひました。」[31] と共感・共鳴し，日頃の鍛錬の様子を綴り，「このからだで，大きくなつたら，てき兵をうつて，加藤少將のやうにならうと思ひます。」[32] と強く心を揺り動かされる読者もあった。

さらに，「幼年雑誌の持つ感化力，及ぼす影響力の大きいことは，作家，畫家諸先生も，編輯者も，常々深く心してをります。」と幼年倶樂部編集部が言うように，作家である椋自身もこのことは十分に「心していた」と思われる。従って，作品「太郎のかた」の「忘れてはならない重い意味」[33] を，鳥越の言う新しい領域への挑戦の際の「作者の大きな誤算」[34] と捉えてはならない。また，鈴木は「太郎のかた」に「当時の時代状況の影が落ちている」[35] と曖昧な言葉で留め，「じょうぶなかたをつくり，おおきな日本がかつげるようになつてくれ」という

「兵たいさん」のメッセージを「侵略戦争を支持するポーズ」と見ている。しかしながら，椋が作品「太郎のかた」で描いた中に，「ポーズをとりながら語り込んだ別の真意」は見当たらない。従って椋鳩十作「太郎のかた」が両者の言う新しい領域への挑戦によって生まれた作品ではなく，まさに時局や，『幼年倶樂部』の編集部の求めに応じ，椋が執筆したと考える。従って，作品に描かれている太郎の姿や，「兵たいさん」のメッセージに，当時の時流に乗った椋の思想性を見ることができる。

まとめ

本研究では，作品「太郎のかた」に「重い意味がある」とする鳥越・鈴木両者の見解を検討することにより，作品「太郎のかた」の執筆は，鳥越の言う「誤算」ではないことを明らかにした。

「太郎」像の変化，「野天風呂」の意味の変化に着目して分析及び考察を試みた結果，「戦争ごっこ」に興じ，唱歌も歌えば軍歌も歌う天真爛漫な少年であった太郎が，尊敬し憧れる「兵たいさん」と一緒に「野天風呂」に入ることにより変化する。太郎は「兵たいさん」に「肩が少し痩せてるな」と言われ，「大きな日本がかつがれるような丈夫な肩を作らなくてはいけないな」と激励される。その激励は軍国少年へと導く教育であり，その教育の結果，太郎は自ら風呂の水くみをして鍛錬する「自覚的な軍国少年」として変化・成長したことが明らかになった。

「大きな日本」とは，他国を侵略し拡大する日本であり，「かつがれる」とはそういう日本を支え担う一員となることである。言い換えれば，侵略戦争の担い手になることである。

また，太郎のコンプレックスであった「野天風呂」は，元来青天井の下，自然を身近に感じられる「地球の真ん中にでんとすえられた素晴らしい風呂」であった。しかし，椋はこののどかな「野天風呂」さえも「軍国教育の場」とし，やがては太郎の「鍛錬の場」，即ち軍国少年を育てる道具にしてしまった。ここに，児童文学者として，また教師としての当時の椋の思想性が示されている。これが鳥越の言う，作家椋鳩十及び椋鳩十児童文学の「負の側面」である。

注

1）1984年長谷川潮によって発見，報告された。長谷川潮，「軍神と犠牲者のあいだ―国家の戦争と個人の戦争像」，『日本児童文学』，日本児童文学者協会，1984年８月号
2）鳥越信，「椋鳩十と雑誌『幼年倶樂部』―椋文学研究の新しい局面を迎えて―」，椋鳩十生誕百年祭実行委員会・教育委員会・椋鳩十記念館，『感動と運命』，2005，p. 35
3）同上
4）同上
5）鈴木敬司，『椋鳩十研究　戦時下の軌跡』，菁柿舎，2006，p. 142
6）同上，p. 203
7）同上
8）「東京朝日新聞」，1941年12月８日夕刊　［12月９日発行］，１面
9）「東京朝日新聞」1941年12月９日日刊，１面
10）「あゝ軍神・特別攻撃隊九勇士」，「大阪朝日新聞」，1942年３月７日日刊，１面
11）『幼年倶樂部』1942年５月号，掲載作品は以下の２作品である。
　①　小野忠孝，詩「ああ軍神九はしら」（p. 24－27）
　②　大木雄二，「軍神岩佐中佐」（p. 118－127）
12）文部省唱歌「ツキ」の一節である。「ツキ」は1910（明治43）年７月21日，文部省発行『尋常小学讀本唱歌』に発表されて以来，第五期国定教科書「ウタノホン　上」（曲名は「オ月サマ」）まで，曲名を変更しながら継続して取り上げられた。戦後検定教科書制度となるも，引き続き教科書に取り上げられ，長い間子どもに親しまれ，歌い継がれた。
13）軍歌「露営の歌」の一節。1937年の毎日新聞（当時の東京日日新聞・大阪毎日新聞社が共同で）の懸賞募集によって世に出た軍歌で，作詞は薮内喜一郎であった古関祐而の作曲によりレコード化され，大流行した。（古関裕而，『古関裕而「鐘よ鳴り響け」』，日本図書センター，1997　参照。）
14）日本は，明治の開国以来富国強兵策に力を入れ軍国主義を推し進めてきた。以来子どもの日常生活にもその反映が見られ，遊びでも男児は陸軍や海軍兵士，女児は従軍看護婦になる戦争ごっこが人気であった。おもちゃも，兵隊人形，軍艦，飛行機，戦車といった戦争に結びつくものが多く，こうした傾向は日中戦争後はさらに強まる。（羽島知之編集，『資料が語る戦時下の暮らし』太平洋戦争下の日

本：昭和16年～20年，麻生プロデュース，2004，p. 88－89参照。）
「軍人人形が驚異的に売れ，印刷玩具も軍人が主流となった。デパートの子ども乗り物の売り場には，戦車や飛行機を模したものが陳列され，七五三の晴れ着にも，陸軍大将・海軍大将の軍服が売られ，女の子には，従軍看護婦の衣装まで用意された。」（山中恒，『［図説］戦争の中の子どもたち―昭和少年文庫コレクション』歴史博物館シリーズ，河出書房新社，1989，p. 18－19参照。）
写真「靖国神社の七五三もすっかり軍国調」（1941年11月15日），『朝日歴史写真ライブラリー　戦争と庶民1940～49　①大政翼賛から日米開戦』，朝日新聞社，1995，p. 51参照
以上の資料にみられるように，当時子どもにとっての「兵たいさん」は，英雄像として，遊びの中で模倣する憧れの対象であった。

15）1941年12月８日に日本軍はマレー半島，ハワイ真珠湾を攻撃し太平洋戦争開戦となった。開戦２日後の12月10日にはマレー沖海戦で大勝し，以来日本は「破竹の勢い」でアジアに侵攻した。１月２日マニラ占領，２月15日シンガポール占領，３月８日ビルマ・ラングーン占領，４月９日フィリピン・バターン半島占領，５月１日ビルマ・マンダレー占領と侵攻は続くが，６月５日のミッドウェー海戦で日本の連合艦隊は大敗し以後劣勢に傾いて行く。「日本が，ぐんぐん大きくなつてゐること」というのはまさに作品「太郎のかた」が掲載された1942年６月までの日本軍の状況である。ミッドウェー海戦で日本の連合艦隊が大敗するが1942年６月10日の大本営発表はミッドウェー海戦で日本軍が敵艦隊に大打撃を与えたと事実と異なる発表をし，以後も相変わらず日本軍の勝利という偽りの戦果を伝えてきた。

16）「新聞・ラジオは日本軍の連戦連勝のニュースを伝え興奮のうちに一九四二年の新年を迎えた。一月二日，日本軍はマニラを占領し，二月十五日にはシンガポールを陥落させた。そして二月十七日，最初の戦捷祝賀行事が行なわれた。……（中略）……／そのころ学校で戦勝学習地図が販売された。これには，小さな日の丸やら爆弾やら，沈没する艦船の絵が別紙でついており，それを切りとって，新しい占領地や，爆撃地，あるいは海戦洋上に貼りこむ仕掛けになっていた。（山中恒，『［図説］戦争の中の子どもたち―昭和少国民文庫コレクション』，河出書房新社，1989，p. 49－50　参照。）
唐澤富太郎も，教室の壁に貼られた「大東亜地図」に「毎日当番制で戦況が書き入れられて行った。」という当時Ｔ師範学校付属国民学校４年生であった児童の回想録を記載している。（唐澤富太郎，『教科書の歴史』，創文社，1956，p. 496参照。）

17）唐沢富太郎，『教科書の歴史』，創文社，1956，p. 496

18）注５，p. 165

19）文部省編，『学制百年史』帝国地方行政学会，1972，p. 574

20）「兵たいさん」の激励のメッセージについては，「太郎像の変化」の［A′］「『兵たいさん』に傾倒し，『兵たいさん』から教育を受ける『太郎』」に述べた。

21）注２，p. 33

22）小森良夫，『市民はいかにして戦争に動員されるか―戦争史の根底を歩んで』，新日本出版社，p. 39－40

23）同上，p. 41－42

24）「御家庭の皆様へ」（幼年倶樂部編輯部），1942（昭和17）年６月号『幼年倶樂部』，p. 178

25）「大きな日本をぐっと担がれるように」とは，「克ク皇国日本ノ負荷ニ任ズベキ」という皇国民の使命であり，水汲みの手伝いをし，体を丈夫に丈夫にすることは「国民ノ基礎的錬成」であった。このように，当時の国民学校教育とは，これを自覚し自ら進んで実践する子どもを育てるものであった。さらにその教育は国民学校の中だけでなく，「学校と家庭および社会との連絡を密にし，児童の教育を全うしようとした」のである。（文部省編，『学制百年史』，帝国地方行政学会，p. 576）

26）文部省編，『学制百年史』，帝国地方行政学会，1972，p. 576

27）注24

28）『幼年倶樂部』1942（昭和17）年９月号「みなさんのおたより」に掲載。上海第八日本校２年男児の便り。

29）『幼年倶樂部』1942（昭和17）年11月号「みなさんのおたより」に掲載。東京市田原校４年の男児の便り。

30）『幼年倶樂部』1942（昭和17）年９月号に掲載された。文は清閑寺健。

31）『幼年倶樂部』1942（昭和17）年11月号「みなさんのおたより」に掲載。山梨県相生校３年の男児の便り。

32）同上

33）注２，p. 33

34）注２，p. 33

35）注５，p. 165